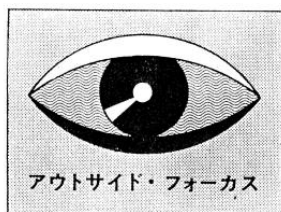


『マネジメント』1970年7月（日本能率協会）



普通教育と職業教育

職業教育への蔑視

最近、たまたまNHKのテレビ番組「こんにちは奥さん」を見ていたら、富山県でいま問題になっている七・三教育が話題になっていた。

七・三教育の七・三というのは、高等学校の職業課程と普通課程の比率のことであって、富山県では県の総合開発計画の方針として産業教育を重視するところから、高等学校の課程の比率を職業7、普通3くらいにしてゆきたいという方針で、過去20年間ぐらい努力してきたが、それが最近、中学生の進学希望をふみにじり、教育をゆがめているという。その実情をお母さんや先生や教育委員会当局、学識経験者が語り合った番組であった。

私が驚いたのは、その七・三教育の当否の問題ではなく、職業教育についての蔑視が、そこに出席したすべての人に根強く生きていたことであつた。とくに教育者がそうであるのには寒気がした。それは極めてはっきりしている。中学校ではテスト、テストで生徒の成績をきめ、成績の悪い者は職業科へ行けということになっているというのである。

これに対してお母さん方からは、大変な反発が出ていた。15歳ぐらいで職業をきめられるのはやりきれない、というのは当然である。15歳で頭が悪いときめつけられ、頭のわるい者の受ける教育である職業課程へ強制的にいれられて、そして一生がきまるというのでは、親も本人もたまつたものではあるまい。せめてあと3年高等学校へ行つて、そのあとにしてほしいと思うのも無理からぬことである。

だが、3年後には、やはりお前は頭が悪いから職業につけといわれることになるのか。これが私にはやりきれないのである。それでは高校3年になつたらもういいのかといえ、そんなことはあるまい。大体、頭の悪い奴、成績の悪い奴は職業につけという言い方が

気に食わないのである。

しかし、そういう考え方は今の日本人の一般通念らしいのだ。恐ろしく間違つた考え方の教師や母親が多いのには驚くほかはないが、産業界はどうなのだろうか

“金の卵”などといわれるが

中学校の卒業生で職業につくのを金の卵などとおだてているが、腹の底ではどう考えているのか。依然として学歴主義があつて、入社するときは金の卵などというが、入社後はこれを育ててやるという考え方がなく、ただ労働を金で買うだけで、使いものにならなくなれば買い殺しか、ポイというのでは、誰でも職業に早くつくことをいやがるのは当然であろう。たとえ名目だけでも、大学のレッテルをもらつて就職したいというのが、一般庶民のささやかな願いとなる。

職業教育をいやがる根底には、産業界の人間の位置づけ方、育て方に問題があることは昔からいわれていることである。しかし、今やそれを論じているだけではいけなくなった。産業界がそういう態度であると、教育界は全部の高校を普通課程にして、職業教育をやめてしまうことにしなければならなくなるだろう。それも1つの方式である。

だがしかしである。今の普通科という観念的な、しかも受験準備的な教育がすべての者の教育になつたら、これは一体どうなるのか。

それならいっそのこと、すべてを職業課程にしたらどうか。いまどき、18歳になるまでに、機械をいじくことや電気をいじくことをしたことがなく、生産することをしたことの無い人間が本当にものが考えられるのか。

こう考えると、職業教育と普通教育についての考え方を、もう一度新しい目で検討し直してみる必要がありはしないか。

(矢口 新)